V. プレFDの取り組み

1. 大学院生のための教育実践講座

本講座は、高等教育研究開発推進センターが主催し、将来、大学教育に携わることを希望する本学の大学院生（OD・PD・研修員などを含む）のために、ファカルティ（大学教員）へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するプログラムです。2020年度は、8月24日に開催されました。16回目となる今回は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、オンライン（Zoom）での開催となりました。

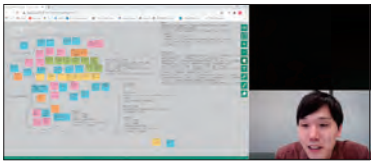
当日は、さまざまな専門分野から59名が受講しました。参加者数は、前年度から20名も増えました。講座内では、大学教育の現状をおさえるための基本的な講義、それをもとに4つのテーマに分かれて大学教育実践について検討するためのグループワーク、本学大学院を修了した若手研究者による、授業実践に関する講義といった多様なプログラムをもとに、受講生それぞれが「大学でどう教えるか」という問いに対して考えを深め、また、参加者同士で意見交換しました。全てのプログラムに参加した受講生には総長名の修了証が授与されました。

研修会直後にアンケートを実施し、プログラム全体に対する満足度を5件法（1: まったく満足していない～ 5: 非常に満足している）で評価してもらったところ、満足度の平均は4.8と大変高い値でした。また今年度も、議論のまとめと報告、全体での質疑応答を実施しました。やや時間不足の感はありましたが、その評価も4.4と、同じく好評でした。参加前後における大学教育に対する問題意識の変化を聞く質問（自由記述）では、「これまで大学教育についてあまり深く考えたことがなかったが、講座を通して様々な課題があることを知り、『自分ならこのように解決したい』というビジョンをもてるようになった」「研究のことで日々頭が一杯な一方で、大学教員として働くことも考えなければいけないと思っているなかで、本講座はその橋渡しとしてとても有意義でした」「聞き手目線で何を持って帰ることのできる授業にするかを、今後意識していきたいと思った」といった回答がありました。受講者それぞれの視点から、未来のファカルティの一員として、大学教育に対する考えを深める良い機会となったようです。

大学院生のための教育実践講座：https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/study/index.html
http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/kouza2020.php

2020年度のプログラム

10:00~	**開会式**	**挨拶：北野 正雄**（教育・情報・評価担当理事・副学長） **趣旨とプログラムの説明：鈴木 健雄**（高等教育研究開発推進センター特定研究員）
10:20~	**セッション1**	**ミニ講義 I「いま大学にもとめられていること」：** **松下 佳代**（高等教育研究開発推進センター教授）
10:40~	**セッション2**	**グループ討論1：**4つの部会に分かれて議論 ①「アクティブラーニング」（岡本雅子）、②「ICT活用」（田口真奈）、 ③「多様性」（勝間理沙）、④「授業デザイン」（長岡徹郎）
12:00~	**休憩**	**Zoomはオフにし、各自でランチ**
13:00~	**セッション3**	**ミニ講義2「学生が学びたくなる授業」：** **斎藤 有吾**（新潟大学准教授）
13:30~	**セッション4**	**グループ討論2：** 上記の4つの部会に分かれて、さらに深く議論
15:00~	**セッション5**	**グループ討論3：** 部会ごとにグループ討論の整理
16:30~	**休憩**	
16:40~	**セッション6**	**発表と全体討論：**各部会から1グループずつ発表。活発な議論を展開。
17:20~	**閉会式**	**挨拶・修了証授与：飯吉 透**（高等教育研究開発推進センター長・教授）



V. プレFDの取り組み

2. 大学院横断教育科目群「大学で教えるということ」

本学では、所属研究科の高度な専門教育に加えて、研究科を横断する教育プログラム（研究科横断型教育プログラム）を2009年度から実施してきました。2018年度からは当該プログラムを改編して、研究科が開講する科目の中で、他研究科学生の履修にも配慮され、多くの専門分野の共通基盤となりうる科目、多数の研究科の大学院生が受講するに相応しい横断的な教育内容の科目をまとめ、「大学院横断教育科目群」として履修できるように整備されました。

その中の「キャリア形成系」（従来は「マネジメント・キャリア・研究者倫理科目群」）の科目として、将来教育職に就くことを希望する大学院生向けの科目「大学で教えるということ」（後期集中講義）を提供しています。「大学院生のための教育実践講座」は、講義とディスカッションが主体の入門的な内容になりますが、本授業は実際の授業をデザインし、模擬授業やピアレビューを行うなど、実際に授業を実践するうえでの基礎となるスキルの育成を含めた応用的な位置づけになっています。本授業の到達目標は以下の通りです。

（1）大学教育の現状を知り、理解すること
（2）授業デザインに関する基本的な知識を知り、理解すること
（3）効果的な授業デザイン（到達目標・評価方法）を作成すること
（4）多様な授業方法を知り、活用方法を計画すること
（5）模擬授業・検討会を通じて、授業実践の技能を磨くこと
（6）グループでの協同作業に積極的に関わること
（7）自身が大学で教えることに関する広い視野と具体的なイメージを持つこと

2020年度は2月9日・10日・12日の3日間で実施されました。今年度はコロナ禍において、フルオンライン授業だったため、教員4名TA3名で授業を行いました。受講生は15名で、修士課程から博士後期課程まで幅広い大学院生が受講しました（文学研究科1名、教育学研究科1名、理学研究科1名、医学研究科2名、工学研究科1名、農学研究科2名、人間環境研究科3名、エネルギー科学研究科1名、地球環境学堂1名、経営管理大学院2名）。オンライン授業でのコミュニケーションとして、Miroなどのオンラインアプリを使用したり、Zoomのブレイクアウトルームを使用したりして、さまざまな形でディスカッションを行いました。そして、専門分野の異なるチーム（4チーム）でコース、授業をデザインし、模擬授業を行いました。終了後のアンケート（15名中15名から回答、回答率100%）では、「学生自身に考えさせる工夫がされていた（平均3.9）」、「内容に関する興味を高めるための配慮があった（4.0）」、「講義に参加しているという感覚がもてた（4.0）」、「総合的に、自分にとって意味のある講義だった（4.0）」（いずれも4段階評定）など高い評価が得られました。自由記述からは、「普段の所属学部の授業とは違い、大学院共通科目の良さが活かされた面白い授業だった」、「文系の方と触れ合うこともなかったので、良い刺激を得られた」、「3日間と言う短いプログラムにもかかわらずとても内容が濃い授業で、非常に有意義な時間が過ごせた」、「自分の専門分野であればどうなるかという点について、さらに自分で深く考えて、実際の授業コマ担当につなげていきたいと思う」、「この授業で、さまざまな分野の人と出会い、社会人になってからもう一度学校に戻ってきた人が多く、みんなとの話し合いやディスカッションを通じて沢山の知識や知恵をもらい、自分の「経験値」が上がった気がする。集中講義は疲れを感じることが多く、早く終わりたいと思うが、この授業では全然感じなかった」、「グループワークがあまり得意ではないのですが、自分なりに楽しめた」といった様々な声が聞かれました。

3. 文学研究科プレFDプロジェクト

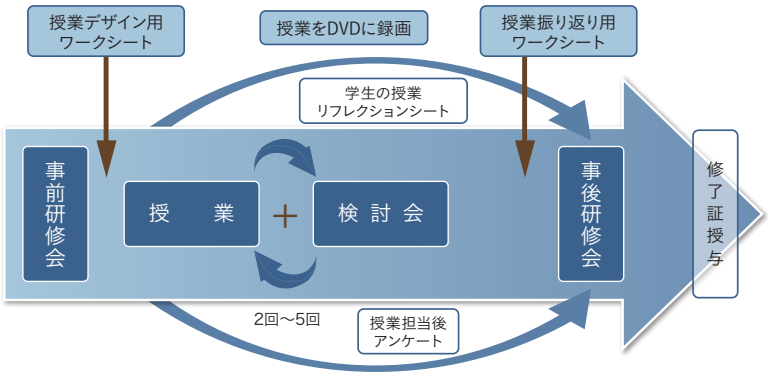
文学研究科プレFDプロジェクトは、文学研究科のOD／PDを対象とするもので、2009年度から実施されています。各授業のあとに担当講師と他の講師、コーディネーターを交えた検討会を実施することと、前期開始前に事前研修会を、年度末に事後研修会をそれぞれ実施することが特徴です。所定の条件を満たした参加者には、本学総長よりプロジェクトの修了証が授与され、すでに約170名が修了証を得ています。

2020年度は、文学研究科よりコーディネーター 5名、教務補佐員3名、講師17名が参加し、高等教育研究開発推進センターより4名がこれをバックアップする形で、哲学基礎文化学系と行動・環境文化学系、基礎現代文化学系の3つのリレー講義が展開されました。

同年度は授業をオンライン化したこともあり、高等教育研究開発推進センターが主導で実施する事前研修会を後期にも実施しました。オンライン化の影響か、各授業の参観者は、例年より多かったように思います。

本授業は、公開授業となっており、学内教職員の参観は随時可能です。日程などの詳細は、以下のHPをご覧ください。

●文学研究科プレ FD プロジェクト
https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/



文学研究科プレFDプロジェクトの流れ

2020年度文学研究科プレFDプロジェクト実施体制

田中 和子：文学研究科教授／統括コーディネーター 兼 行動・環境文化学系コーディネーター

児玉 聡：文学研究科准教授／哲学基礎文化学系コーディネーター

早瀬 篤：文学研究科准教授／哲学基礎文化学系コーディネーター

伊藤 和行：文学研究科教授／基礎現代文化学系コーディネーター

喜多 千草：文学研究科教授／基礎現代文化学系コーディネーター

小林 敬：哲学基礎文化学系教務補佐員

長岡 徹郎：行動・環境文化学系教務補佐員

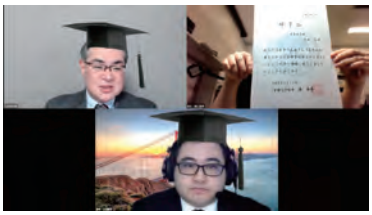
朴 美暻：基礎現代文化学系教務補佐員

飯吉 透：高等教育研究開発推進センター長・教授

松下 佳代：高等教育研究開発推進センター教授

田口 真奈：高等教育研究開発推進センター准教授

鈴木 健雄：高等教育研究開発推進センター特定研究員



V. プレFDの取り組み

2020 年度のプレ FD を振り返って

統括コーディネーター（兼 行動・環境文化学系コーディネーター）から

文学研究科教授
田中 和子

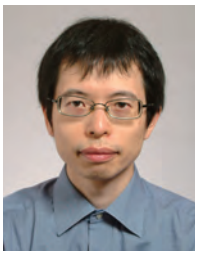
文学部プレFDを含む2020年度の入門ゼミナールは、新型コロナウィルスの感染拡大防止のため、年度当初、約1か月にわたる授業休止のあと、オンライン授業での実施となりました。対面授業のつもりで準備をされていた講師の方々も、サポート役の教務補佐員の方々も、初めての経験で戸惑いが大きかったことと思います。コーディネーターにとっても、授業をリアルタイムで受講する学生たちの他に、授業資料を読み、録画された動画を視聴して課題を提出する学生たちがいるという異なる受講形態に対応するなど、想像もしていませんでした。講師の方々には、講義ではなく、課題提出のための説明へと、授業構成も時間配分も変更し、伝える内容も大幅に絞っていただきました。また、今回、初めてZoomやPandAといったツールを体験された方も少なくありません。2020年度のプレFD研修を修了された方々が、この経験を踏まえて、対面授業とオンライン授業、それぞれの長所を活かしつつ、教育経験を重ね、教える力を高めてくださることを期待しています。

各系のコーディネーターから

●哲学基礎文化学系

文学研究科准教授
児玉 聡

COVID-19のパンデミックにより、今年度のプレFDの授業は全面的にオンライン講義で行われました。対話を重視する哲学にとっては、対面授業ができないことは大きな障壁になる可能性がありましたが、高等教育研究開発推進センターのサポートと、講師のみなさんの創意工夫により、充実した講義を行うことができました。具体的には、(1)講師が授業計画を綿密に立て、事前に予習課題をPandAで提示する、(2)普段以上に集中力を要するZoomでの講義は少し手短に実施し、代わりに予習と復習の時間を十分に確保する、(3)終了後に学生や他の講師から講義の仕方について忌憚のないフィードバックを受ける、という形で行いました。今後も当面は対面とオンラインのハイブリッド型授業が実施されると考えられるため、講師にとっては、優れた授業をするための技法を身につけるまたとない機会となったのではないかと思います。受講生が若干少ないのが残念でしたが、みな若い講師たちの学問への情熱を受け取ったことと思われます。プレFDに参加した講師たちと学生たちの今後を楽しみにしています。



文学研究科准教授
早瀬 篤

プレFDに関わる仕事をしたのは今回がはじめてですが、私自身も多くを学べる有益な機会だったと思います。新型コロナウィルス禍のなかで、担当講師の方々にはZoomを利用したオンライン授業を行っていただきました。講師側からは学生の反応が見えづらいのでやりにくかったと思いますが、皆さん講義中に少しも戸惑うことなく、淀みなく話をしていました。また専門の知見を50分程度に凝縮した内容は毎回聞き応えがありました。遠隔授業の特性を活かし、授業は録画されて、学生が都合のよい時間に視聴できる教材として提供されましたが、質の高いものができたと思います。惜しむらくは、まさにこのために、ライブで参加する学生がごく少数で、ほとんど双方向的な授業にならなかったことです。個人的には、若い講師の方々が遠隔講義で双方向性を出すための機能やウェブサイトなどをどのように利用するのか見てみたかった気がします。今後、遠隔授業が継続的に行われるのか不明ですが、今回参加された講師の皆さんなら対面でも質の高い授業をできると信じますし、今後の活躍に期待したいと思います。

●基礎現代文化学系

文学研究科教授
喜多 千草

2020 年度の基礎現代文化学系のプレ FD は、科学史の伊藤先生とメディア文化学の喜多でコーディネーターを担当しました。系ゼミナールは前期・後期とも開講しましたが、後期はすでにプレ FD を終えた講師ばかりとなったため、プレ FD は前期のみとなりました。教務補佐員のパク・ミギョンさんは、後期の非常勤講師でもあり、これまでの経験を十分に生かしてプレ FD の準備・実施・まとめを行なってくださいました。またこれまでの資料や手順を取りまとめていただき、今後のコーディネーターや教務補佐員が過去からの学びを生かせるようになりました。2020 年度の特筆すべき点は、やはりオンライン開講という授業形態でしょう。講義を担当する非常勤講師の皆さんだけでなく、コーディネーターも教務補佐員も初めての経験となるオンライン・リアルタイム講義でしたので、全員が知恵を出し合ってのプレ FD となりました。配布資料の著作権処理、講義のわかりやすさと通信量の妥協点など、定まった方法論がないなかでの模索は、全員にとっての生きた FD だったと思います。

4. 大学コンソーシアム京都との連携による単位互換リレー講義

本プログラムは、文学研究科プレFDプロジェクト(pp. 25-26)修了後の発展的プログラムとして、文学研究科が大学コンソーシアム京都との連携のもと提供するものです。前身のプログラムが2015年度に開講されて以来、6年間に亘って開講されてきました。開講にあたっては高等教育研究開発推進センターが支援を行っています。本学の学生を含む、大学コンソーシアム加盟校の学生を対象とした、リレー講義形式の単位互換科目です。本年度は、7大学から35名が受講しました。

本プログラムでは、参加する若手講師たちが、個々の担当授業だけでなく半期15回の講義全体をデザインするという経験を積むことに主眼がおかれています。そのため、プログラムは開講の前年からスタートします。そこで、各自の担当授業と全体目標とのすりあわせを行いながら、シラバスを作成するとともに各授業の構想を練ります。また、授業の一週間前にはそれぞれが翌週の授業の概要を持ち寄り、全体の到達目標を見据えつつ、各自の授業目標を確認、そのための具体的な授業デザインを検討し合っています。

2020年度の開講テーマは「京都で学ぶ人文学：『ちゃんとした大人』って何？」でした。本年度はZoomを用いたリアルタイムでのオンライン開講となりました。コーディネーター 1名のもと、社会学、歴史学、哲学といったさまざまな専門分野出身の若手講師6名が、オンラインでのアクティブラーニング型の授業を展開しました。オンライン授業もアクティブラーニングも、それぞれ初めて経験するという講師もいましたが、高等教育研究開発推進センターの教職員によるサポートを受けつつ、全員が知恵を出し合いながら授業デザインを検討・作成していきました。

受講生間のディスカッションを促すための工夫が凝らされた本授業を通じて、受講生は自立した生活・ジェンダー・死の受容・AI・極限状態における意思決定などをテーマに、多様な観点から考察することで、ものごとを複眼的に捉えることの重要性について学びました。

受講生募集用ポスター

授業の様子

●文学部単位互換リレー講義「京都で学ぶ人文学」
https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/consortium/

2020年度の授業を振り返って

大阪府立大学非常勤講師　梅野 宏樹
(文学研究科思想文化学系宗教学専修出身／「『自分』の死を『ちゃんと』受け入れる／受け入れない」の回を担当)

私は宗教哲学の立場から2回の授業を担当させていただきました。様々な大学から集まった学生はグループワークに意欲的で、(準備・結果発表を除き)20分程度のグループワークでは時間が足りないほど積極的に意見を交わしていたことが印象的です。こうした学生の熱意に応えるため、各講師が「この授業で何をどのように学んでほしいのか」という基本を徹底的に吟味し、検討会で議論することで授業を洗練させていきました。その上で、チャットや投票などの機能を駆使した、オンラインならではのアクティブラーニング型授業が行われました。オンラインのグループワークには、講師の目が全グループに行き届きづらいという難点がありますが、本講義では多くの講師が毎回の授業を参観していたため、互いに協力してグループを見回り、学生の議論をサポートすることができました。このように、講師間の協力体制の下で授業の質を高めていくことができたのは、私にとって得がたい経験です。

京都大学高等教育研究開発推進センター特定研究員　鈴木 健雄
(文学研究科現代文化学系現代史学専修出身／「逃げるか従うか抗うか？ヒトラー政権下ドイツ人の事例とともに考える」「まとめとレポートの書き方」の回を担当)

専門領域(ドイツ現代史)を扱う授業回とまとめとレポートの書き方の回を担当しました。開講期間中は、自身の勉強を兼ねて、全15回の授業に参加し、その後の検討会にも加わりました。検討会の議論に加わることで、個々の授業デザインはもちろんのこと、コース全体のデザインの「勘所」を掴めたような気がします。

本プロジェクトではアクティブラーニングの実施が必須とされています。今年度はそれをオンラインで実施するという困難がありました。しかし、都度2時間近くに及ぶ毎回の検討会のなかで、活発な議論と知識の共有、授業内容の調整を行うことにより、オンラインながら対面と遜色のない質の高い授業を提供できたように思います。

検討会には毎回ほぼすべての講師と高等教育研究開発推進センターの教職員が参加しました。ここで得た、お互いに切磋琢磨し合える同僚との関係は、今後大学教員として生きていくなかで貴重な財産となるに違いありません。

V. プレFDの取り組み

5. TA と協働してオンライン授業を行う

対面授業とオンライン授業では、TA の役割や気をつけておくと良いことも異なります。そこで、高等教育研究開発推進センターが主催し、4 月 27 日、10 月 7 日に TA を対象とした学内講習会を実施しました。また、Teaching Online@ 京大に「TA と協働してオンライン授業を行う」というセクションを開設し、情報を掲載しました。ここでは、講習会の概要について紹介します。

●学内講習会

4月27日　「TAとしてオンライン授業を支援する」

目的		**どのようにオンライン授業の支援をするのか** **授業支援のために必要なスキルは何か**
プログラム	11:00-11:05	**本日の講習会の進め方　山田 剛史**
	11:05-11:10	**趣旨説明　松下 佳代**
	11:10-11:30	**オンライン授業とは　田口 真奈**
	11:30-11:40	**TAとして期待されること　佐藤 万知**
	11:40-12:00	**質疑応答　酒井 博之ほか**

10月7日　「TAとしてハイブリッド型/オンライン授業を支援する」

目的		**ハイブリッド型授業の異なる形式を知る** **オンライン授業あるいはハイブリッド型授業を支援するための基礎的な知識・スキルについて知る**
プログラム	12:00-12:15	**講習会の目的と進め方　佐藤 万知**
	12:15-12:30	**オンライン授業・ハイブリッド型授業とは　田口 真奈**
	12:30-12:40	**TAに期待される役割　佐藤 万知**
	12:40-12:50	**質疑応答　佐藤 万知・田口 真奈ほか**

オンライン授業では、さまざまなツールを用いた学習活動が可能である一方で、事前に準備や設定が必要なことなども多くあり、TA とうまく協働することが円滑な授業運営において重要となります。4 月に実施した研修会では、コロナ禍の教育活動についての本学の方針を共有した上で、オンライン授業の分類として同時双方向型とオンデマンド型授業の特徴と流れを確認しました。その上で、TA 制度の目的と役割を確認し、「オンライン授業運営のチェックリスト」をみながら、オンライン授業だからこそ気にしなければならないポイントをみていきました。10 月の研修会では、感染症対策をしつつオンラインから対面授業への移行していく状況を踏まえ、対面とオンラインを組み合わせるハイブリッド型授業における TA の役割について扱いました。ハイブリッド型授業には、ハイフレックス型（同じ授業を対面とオンラインで同時に実施）、ブレンド型（対面とオンラインを組み合わせる方法）、分散型（学生が分散して受講）の 3 つのタイプがあるため、それぞれにおける授業運営上のポイントを確認しました。その後、「教員＆TA で実施するハイブリッド型（ハイフレックス型）授業運営のためのチェックリスト」（表 1）を用いて、TA の役割についてみていきました。今後も、状況の変化に応じて、TA および TA と協働して授業を実践する教員向けの情報発信や講習会を企画していく予定です。

教員＆TAで実施するハイブリッド型（ハイフレックス型）授業運営のためのチェックリスト 2020年10月7日版

このチェックリストのお薦めの使い方
1．このチェックリストを教員・TAで共有し，「教員担当」「TA担当」の欄に，主担当（実際に作業する人）なら「o」，副担当（支援・確認する人）なら「O」，この授業では不要な項目には「×」をそれぞれ書き込む．
2．作業が完了したら，「済」のチェック欄に「O」と書き込む．
3．必要に応じて項目を増やしたり，メモを書き込んだりして使ってください．

	タイミング	大項目	小項目	教員担当	済	TA担当	済	必要な情報のアクセス方法	留意点
		教員＆TAのICT環境	PCがあるかの確認						
			教員とTA両方について，インターネットの通信容量は無制限か？速度は十分か？						オンデマンド型であっても動画を使用する場合は要確認．
		授業計画	実行可能な学習到達目標，評価，授業方法であるかを見直して，教員・TAで共有・適宜修正					KULASIS掲載のシラバス	必要に応じて，授業計画を書いたWordファイルなどがあると便利です．

表1　教員＆TAで実施するハイブリッド型（ハイフレックス型）授業運営のためのチェックリスト2020年10月7日版